

# 近世楷書体文献の電子テキスト化における漢字字体処理について

—『和蘭字彙』を例に—

(続編)

櫻井 豪人

## 要旨

本稿は先に公表した論文「近世楷書体文献の電子テキスト化における漢字字体処理について—『和蘭字彙』を例に—」(『国語と国文学』93-5、2016年)の続編である。幕末期の蘭日辞書『和蘭字彙』(安政二～五1855-58刊)は、美濃本で千八百丁を超える蘭学時代最大の蘭日辞書であるが、本稿では、用例検索を目的とした同辞書の電子テキスト化作業において生じた異体字判断の問題の例をいくつか掲げて、同辞書内での用例数を数えることにより、それぞれの漢字が事実上の異体字として用いられていたのか否かについて分析する。

## 1. はじめに

筆者は近年、幕末期の蘭日辞書『和蘭字彙』(桂川甫周梓、安政二～五1855-58年刊)を電子テキスト化し、それにより、刊本として日本初の英和辞書『英和对訳袖珍辞書』初版(文久二1862年刊)の中にある『和蘭字彙』に見られない訳語を確定するという研究を行ってきた(拙稿2013a・2013b・2014)。

現在はその電子テキストを公開するための作業を行うとともに、『和蘭字彙』以前の蘭日辞書、すなわち『波留麻和解』(寛政八1796年刊)、『訳鍵』(文化七1810年跋刊)、『増補改正訳鍵』(安政四1857年刊)の電子テキスト化も進めているところである。

電子テキスト化とその公開の目的は、これらの辞書に収録されている訳語を誰もが容易に検索できるようにすることにある。上記のような蘭日辞書は、辞書という性質上、目的とする訳語を探し出すのが比較的容易ではあるものの、当時のオランダ語の綴りは一定でなく、また、予想外の見出し語の中に目的とする訳語が存在しているということも少なくないので、目的とする訳語をオランダ語から検索するという方法には限界がある。一方、その全文が電子テキスト化されれば、目的とする訳語を直接検索することができるようになり、研究上の利便性が格段に向上する。

しかし、実際に電子テキスト化する作業を行ってみると、どの字を用いて翻字すべきか判断に迷う場面がよくある。『和蘭字彙』に限らず、近世の文献では現代の規範と異なる字体や用字法で記述されている箇所が数多く存在するためである。

この問題について、筆者は先に一論考を示し、近世楷書体文献を電子テキスト化する際の問題点とその処理方法をいくつか紹介した。(拙稿2016、以下「前稿」と称する。)

具体的には、『和蘭字彙』の日本語部分の全文をMicrosoft Word<sup>注1</sup>に入力し、同ソフトの「あいまい検索」を利用して本文検索する場合の漢字字体処理について述べた上で、以下の方針を取ることに論じた。①「あいまい検索」の制約により、なるべくJIS第1・2水準の字体を用いること。②「訛字」と「同形異字」という概念を導入することにより、場合によっては実際に記されている字体の通りに翻字するのではなく、現代の書き分け基準に従って翻字すること。③現代において一般的でない表記については、現代一般の表記を《 》内に入れて併記することにより検索の漏れを防ぐようにする、「別表記挿入」を行うこと。④字体の上からは別字と判断される字であっても、別字としての用法が見られず、事実上異体字として用いられていると見られるJIS第3水準以下の字は、異体字と見なしてJIS第1・2水準の字体を用いて翻字すること。

本稿では、紙幅の都合で前稿において論じられなかった異体字判断の実例について、『和蘭字彙』における楷書体漢字の使用実態を示しつつ考察していく。

なお、前稿と同様、本稿でも括弧書きのローマ数字によってJIS漢字水準を記すことにする。例えば（I）ならJIS第1水準の漢字ということである。

## 2. 問題の実例

前稿でも述べたように、Microsoft Wordの「あいまい検索」においてJIS第3水準以下の漢字（JIS第3・4水準、およびJIS配当外の漢字）に含まれる異体字はJIS第1・2水準の漢字で検索してもヒットしないので、なるべくJIS第1・2水準の字体で翻字する方針を取る。その際、字体の上では本来別字であっても、『和蘭字彙』の中でその字が別字として用いられていなければ、異体字と見なして翻字することを述べた。例えば、「訥」（Ⅲ）は本来「キン」の音を持ち、「よろこぶ」の意の漢字であるが、『和蘭字彙』においてその意味で用いられている例は見られず、もっぱら「訥」の字と同様に用いられている。また、新井白石の『同文通考』（宝暦十1760年刊）<sup>注2</sup>にも、「訥」を「ウツタへ／ソ」に用いるのは誤用であり、正しくは「訥」であるという旨が記されているが（四17オ）、前稿ではこういったものを事実上の異体字と認めた上で「訥」で翻字するという方針を定めた。この類の多くは一方の字がJIS第3水準以下の文字であるので、なるべくJIS第1・2水準の字を用いて翻字するという方針にも適合する措置であると言える。

しかし、そのような例とは異なり、もう一方の字もJIS第1・2水準の字で比較的良好に用いられる字である場合には、安易に上記のような判断を下すわけにいかない。

例えば、『和蘭字彙』における「班」の字は、大抵「まだら」の意味、すなわち「斑」の字の意味で用いられている。こういった場合、「班」を「斑」の「異形同字」となった「訛字」と見なして「斑」とすべきか否か、判断に迷う。

現代の漢和辞典で「班」を調べてみると、最後の方に「まだら」の意味が挙げられているので、必ずしも誤りとは言えない（後述）。とはいえ、検索する側からすれば、「斑点」で検索してもヒットしないのは「検索漏れ」が生じることになるので不都合であろう。そこで『和蘭字彙』の電子テキストでは、「班點《斑点》」などと入力し、「斑点」でもヒットするようにしている。（これを前稿では「別表記挿入」と呼んだ。）

しかし、このように処理すれば検索の漏れは防げるものの、実際のところ『和蘭字彙』では「斑」と「班」をどのように扱っているのかという根本的な疑問が残る。「斑」と「班」とでは何らかの書き分けがなされているのかいないのか、あるいは「班長」のような意味の用法ではどのような字が用いられているのかといった疑問は、解決されないまま放置されることになる。

本稿ではこの種の事例をいくつか取り上げ、『和蘭字彙』における用字法について分析をするとともに、前稿と同様、最終的な処理の方法について述べていく。

### 3. 近世楷書体資料としての『和蘭字彙』の性格

実際の分析に入る前に、『和蘭字彙』の資料的性格について述べておく。

本研究は、洋学資料研究や翻訳語研究を目的とした電子テキスト化の作業において生じたものであり、最初から字体研究や用字法研究を目的として始められたものではない。しかしながら、作業を進めて行くうちに、『和蘭字彙』にはこの種の研究に向いていると思われるいくつかの特徴があると考えに至った。以下、その諸点を挙げる。

まず最初に、『和蘭字彙』は近世日本で使われていた俗字の類を豊富に含んだ楷書体文献であり、当時の日本における楷書体の使用実態を反映していると目される点である。単に楷書体文献と限定するだけなら漢籍・仏典に数多く存在しているが、それらにおいて用いられている字体（特に漢文本文の字体）は、輸入した漢籍に記されている字体をそのまま記している可能性が考えられ、近世日本で使用される俗字の実態を反映しているとは限らないという問題点を含む。その点『和蘭字彙』は、文化十三（1816）年までに長崎出島のオランダ商館長ドゥーフHendrik Doeffが編纂したアルファベット表記の蘭日辞書を、長崎の阿蘭陀通詞たちが天保四（1833）年までに漢字仮名交じり文にして完成させ（『ドゥーフ・ハルマ』）、さらに江戸の蘭学者桂川甫周らが校訂を加えて幕末期に刊行したものであるため、そ

の編纂過程を考えると、漢籍や仏典に用いられている字体ではなく、当時の日本の知識人たちが日本語を記す際に用いていた楷書体そのまま反映されているものと考えられる。くずし字で筆記することが日常であった近世の日本において、漢籍や仏典との関わりを直接持たず、かつまとまった分量を有する刊本の楷書体文献はそれほど多くないように思われる。

次に、辞書としての分量の豊富さと内容の偏りの少なさが挙げられる。『和蘭字彙』は蘭学の最終期に出版された蘭日辞書で、同様の蘭日辞書類の中では群を抜いて規模が大きく、見出し語数が多いだけでなく、例文も豊富に含まれていることがその特徴として挙げられる。底本となったハルマFrançois Halma蘭仏辞典第2版（1729年刊）は『和蘭字彙』の130年ほど前に出版された辞書なので、内容の古さは否めないが、そのことは漢字字体や用字法の研究に大きな影響を与えるものではなく、日常から非日常に至るまで多くの見出し語と語釈・例文を備えていることにより、含まれる漢字の種類や出現頻度も自ずと高いものになっているものと考えられる。

さらに、その編纂に関わった人物たちがそれなりの知識層であるということも利点として挙げられる。『ドゥーフ・ハルマ』にしても『和蘭字彙』にしても、その編纂に関わったのはいずれも当代一流の蘭学者たちである。漢学者ではないが、素養としての漢学は修めていたはずであり、市井の町人などが記したものに比べて誤字・誤用の類は少ないものと期待される。

しかし、上記のような利点とともに、気を付けなければならない点も存在する。

それは、複数の人間が『ドゥーフ・ハルマ』や『和蘭字彙』の編纂に関わっており、それゆえ一人の人間の書記規範によって記されているのではないという点である。『ドゥーフ・ハルマ』の緒言（1816年）にはその校正・書写を担当した者として、中山得十郎・吉雄権之助ら十一名の長崎阿蘭陀通詞の名が挙げられており、それを翻刻出版した『和蘭字彙』は、編纂の主幹となった桂川甫策の跋文において、編纂の協力者として金田八郎兵衛・柳河春三・柳下震達・石井久吉・湊三郎・塩谷順之丞・足立鉞蔵・秋庭清嘯・中村静淵、そして甫策の姉の香月（ゆた）・兄（甫周）・弟（主税）の名が挙げられている。その中で用いられている字体や用字法は、一人の人間によって統一されたものとは考えにくく、複数の人間の書記実態が重層的に塗り重ねられたものであると考えるべきである。実際、字体や用字法はもとより、筆跡にもばらつきが見受けられるので、草稿は勿論のこと、版下を書いた人物も複数いたものと見られる。個人差によるばらつきが内包されているのであるから、誰による表記なのか分からないまま異なる書記意識が混在しているという点は、用例数による分析において短所となり得るかもしれない。しかし、そこに関わった人数が多ければ多いほど、その中で観察されるばらつきは却ってその集団での許容の幅を示すことにもなる。実際、『和蘭字彙』の漢字表記を先行研究で報告されている内容に照らし合わせてみても、そのばらつきは近世日本で許容されていた表記の幅の範囲内におおむね収まっているように感じられる。

以上のようなことから、『和蘭字彙』は近世期楷書体の書記実態や規範意識を知る上での

一つのサンプルになり得るものと思われる。実際、前稿でも示した通り、『同文通考』や『倭楷正訛』に記されている俗字や訛字の類が、『和蘭字彙』には豊富に出現する。

#### 4. 本稿で目指すもの

実際のところ、本稿で示す字体や用字法の問題は、先行研究で既に言及されていることが大半である。それはすなわち、『和蘭字彙』の字体や用字法が特殊なのではなく、多くの近世文献と共通しているものであるということであろう。

しかし、具体的にどのような頻度や割合で当該の字体や用字法が出現するのか、あるいは異体字のように用いられる字の組み合わせがあるとして、何らかの書き分けが存在しているのか否かについて計量的に分析された先行研究はほとんど見られない。計量的な分析を必要としないようなものも少なくないであろうが、使用傾向を調べてみなければ、異体字として用いられていたのか、あるいは一部の用法における通用であったのか分からない事例も存在する。その点、『和蘭字彙』という一つの資料の中であれば、その実態を計量的に示すことが可能である。勿論、その中で見られる傾向が全ての近世楷書体文献に当てはまるわけではないが、こうした分析の積み重ねが、近世楷書体漢字の運用実態の解明につながることは間違いないであろう。

#### 5. 本来異体字ではないものがほぼ異体字として用いられている例

以下、いくつかのパターンに分類しつつ実例を示していく。

まず、本来異体字ではないものがほぼ異体字として用いられている例について見て行く。

##### 5.1. 砲・炮・鉋・鉋・鉋の問題

砲 (I・ホウ)・炮 (II・ホウ・あぶる)・鉋 (II・ホウ・かんな)・鉋 (IV・シヨク・かんな)・鉋 (IV・シ・ほこ・なた)

現代では「砲」と書くべきところが、『和蘭字彙』では「炮」や「鉋」で書かれている場合がある (図版1)。

図版1 『和蘭字彙』における砲・炮・鉋の例<sup>注3</sup>

砲 (鉄砲・A16オ)	鉄砲ヲカマユル
炮 (鉄炮・C2オ)	騎馬武者用ニ鉄炮
鉋 (鉄鉋・A16ウ)	鉄鉋ヲ構ハス



図版1の三例では、いずれも「てっぽう」の表記として用いられている。『和蘭字彙』ではこのように「炮」や「鉦」で書かれた「てっぽう」が複数見られるので<sup>注4</sup>、「炮」(II)や「鉦」(II)は「砲」(I)の異体字であるかのように見える。しかし「炮」は基本的に「あぶる」と訓む別字であり、「鉦」も通常は「かんな」と訓む別字である。

「炮」について漢和辞典を調べてみると、『大漢和辞典』<sup>注5</sup>の「炮」(巻七p.389)では、「あぶる」の意の他、いくつかの意味が挙げられている中で「おほづつ。礮(8-24580)に通ず。」という意味も記されている。「礮」は近世の蘭学資料でもよく「砲」と同様に用いられる字であり、その語釈は「砲」の字と同様の意味用法と解される。しかし、『大漢和辞典』における「炮」の「おほづつ」の意味での用例は『中華大字典』の記述しか記されておらず、中国語ではかなり新しい用法であったものと見られる。また、『改訂新版漢字源』(学習研究社2006年)の「炮」(p.927)では、「あぶる。」等の他に「火薬を包んで破裂させる道具。大砲。」の意味を載せている。このように、比較的新しい用法であったにせよ、漢和辞典の「炮」には「砲」と同様の用法が掲載されている。

日本での「てっぽう」の表記は、「砲」よりもむしろ「炮」の字の方が古くからよく使用されていたようである。天文十二(1543)年に種子島に鉄砲が伝来した由来を記した『鉄砲記』(南浦文之著、慶長十一-1606年成、『南浦文集』所収)も「炮」の字で記されており、これ以外でも、近世を通じて「てっぽう」は多く「炮」の字で書かれる。

また、新井白石は『同文通考』の「借用」に「○炮<sub>、ッ</sub> 俗ノ砲ノ字○炮ハ音庖肉ヲ炙フル也」(四15ウ、原附訓点漢文、以下同様)と記しており、「炮」については借用により生じた「砲」の俗字と見ている。

これに対し、「鉦」は漢和辞典を引いても「砲」の意味が確認できない。『大漢和辞典』の「鉦」(巻十一p.513)には「かんな。」「はげ。馬を搔く具。」「きねのくび。」の三つの意味しか無く、「砲」の意味は記されていない。『改訂新版漢字源』の「鉦」(p.1563)も同様に「砲」の意味は見られない。しかし、「鉄鉦」の表記も近世日本ではよく見られ、例えば浄瑠璃『仮名手本忠臣蔵』(寛延元1748年刊)第六に以下のようにある<sup>注6</sup>。

てっぽう みの  
鉄鉦に蓑笠打かけ戻りかゝつて見る勘平  
てっぽう  
鉄鉦で打殺したは舅で有たか

これらの字について、『和蘭字彙』での用例数を数えて分類したものが表1である。これを見ると、「あぶる」の意味で用いられる「炮」も<sup>注7</sup>、「かんな」の意味で用いられる「鉦」も全く見られず、共にもっぱら「砲」の意味として用いられていることがわかる。また、何らかの基準によって「砲」との書き分けが行われているようにも感じられず、両者ともほぼ「砲」の異体字として扱われている状況となっている。

それでは「かんな」はどう表記されるのか。『和蘭字彙』ではその大半が「鉞」や「鉦」で書かれている(図版2)。

「鉞」と「鉦」についても漢和辞典の記述を見てみよう。

表1 『和蘭字彙』における砲・炮・鉦

字体	分類	用例数	具体的用例と内訳 <sup>注8</sup>
砲	鉄砲	6	鉄砲4、紙鉄砲1、弓鉄砲1
	砲銃等の熟語	4	砲台3、銃砲1
炮	鉄炮	50	鉄炮、懐中鉄炮、鉄炮匠など
	砲銃等の熟語	15	砲術5、銃砲5、大炮2、砲礮弾丸2、 <sup>ホーローク</sup> 砲烙火矢1
鉦	鉄鉦	5	鉄鉦4、鉄鉦師1
	砲銃等の熟語	0	

図版2 『和蘭字彙』における鉦・鉦の例

鉦 (かな・G71オ)	鉦カケタル板又材木	
鉦 (かな・K117ウ)	鉦屑ヲ燃ス	
鉦 (かな・B56ウ)	鉦金シリヤレタル	(※鉦に似ている)
鉦 (かな・S3ウ)	鉦屑	
鉦 (かな・S7オ)	其板半ニ鉦削シテヤ	

『大漢和辞典』の「鉦」(巻十一p.545)では、音を「シヨク」とした上で、「化学元素の名。セシウム。Caesiumの譯。」としか記されていない。また、同書の「鉦」(巻十一p.513)は音を「シ」とし、「鉦(11-40636)に同じ。」としている。「鉦」の字の項を見ると(巻十一p.595)、「シヤ・ジヤ・シ」の音が挙げられ、「ほこ」の意味が記されている。

一方、『改訂新版漢字源』を見ると、「鉦」(p.1565)は「セシウム」の意味の他に「**国**」すなわち日本語特有の意味として「かな。木材の面をけずる大工道具。鉦<sup>かな</sup>。」と記されている。また、同書の「鉦」(p.1561)は「柄の短いほこ。」と「酒や水を入れる器。」の二つの意味が記されているだけで、「かな」の意味は挙げられていない。

つまり、これらの漢和辞典によれば、中国語における「鉦」や「鉦」には「かな」の意味が無く、「鉦」には日本語特有の意味として「かな」があるということになる<sup>注9</sup>。

近世期に「かな」を「鉦」と書くことが多いことについては、鈴木丹士郎1987に既に指摘がある(p.5)。

「かな」は「鉦」を用いるのがふつうである。(中略)近世では「鉦」と書かれることが多いのである。

「かな」の漢字表記について、『和蘭字彙』の用例数をまとめたものが表2である。

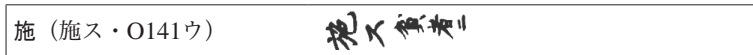
表2を見ると、少なくとも『和蘭字彙』の中では「鉦」が「かな」の意味で用いられている箇所が無く、その一方で「鉦」や「鉦」が「かな」の意味でのみ使われていることがわかる。つまり、一般的な異体字概念とは異なり、『和蘭字彙』の中では「砲・炮・鉦」と「鉦・鉦」がそれぞれの中でほぼ異体字の関係として扱われているということになる。

表2 『和蘭字彙』における鉦・鉦・鉦

字体	分類	用例数	具体的用例と内訳
鉦	かな	0	
鉦	かな	8	鉦カケタル、鉦屑など
鉦	かな	26	鉦カクル、鉦屑、鉦削りなど

もつとも、「砲・炮・鉦」が「ホウ」という音と「鉄砲」の「砲」の意味を兼ね備えているという点からはそのように言えるが、「鉦」と「鉦」は『和蘭字彙』の中に音読みの例が存在しないので、「異体字の関係」と断定するには至らない。しかし、「施ス<sup>貧者ニ</sup>」(O141ウ)のように、「施」の旁が「色」になっている字<sup>注10</sup>を見ると(図版3)、「鉦」と「鉦」を同じ字種(すなわち異体字)と捉えていたことは想像に難くない。これは草書体で書いた場合の「色」と「缶」の形がよく似ていることに起因するものと見られる。実際、『和蘭字彙』の中には、楷書体でありながら「鉦」と「鉦」のどちらかを見分けるのが困難な字体が存在する。(前掲図版2参照。本研究ではおおむね右上が「ク」であるか「フ」であるかで分けた。)

図版3 『和蘭字彙』における「施」の異体字



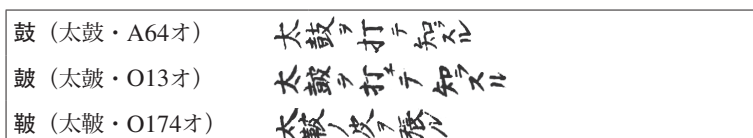
これら「砲・炮・鉦・鉦・鉦」の例を見ると、やはり近世文献での異体字意識は、今日の異体字の概念と同一でないと感じる。しかしながら、「炮」(Ⅱ)や「鉦」(Ⅰ)を異体字と捉えて「砲」(Ⅰ)に統一するのもためらわれる。電子テキストにおいてもなるべく近世期の書記実態を留めておくべきであると考えからである。従って、「炮」と「鉦」は「鉄炮《鉄砲》」「鉄鉦《鉄砲》」などと別表記挿入して対処する。「鉦」と「鉦」はどちらもJIS第4水準の漢字であるが、事実上「砲」の異体字として用いられている「鉦」に置き換えるわけにも行かないので、「鉦《鉦》」「鉦《鉦》」などと別表記挿入して対処する。

## 5.2. 鼓・鼓・鞞の問題

鼓 (Ⅰ・コ・つづみ)・鼓 (Ⅱ・コ・つづみ)・鞞 (Ⅱ・ヒ)

『和蘭字彙』では「太鼓」を「太鼓」「太鼓」と書く例が見られる(図版4)。

図版4 『和蘭字彙』における鼓・鼓・鞞の例





「鼓」(Ⅰ・コ)と「鞞」(Ⅱ・コ)は異体字の関係にあり、Microsoft Wordのあいまい検索でも相互にヒットするので、それぞれそのまま翻字する。一方、「鞞」(Ⅱ・ヒ)は本来別字であり、これらの異体字ではないので、「鼓」や「鞞」であいまい検索にかけてもヒットしない。

近世期に「鞞」が「鼓・鞞」と通用して用いられていたことについては、鈴木1987が既に指摘している (p.22)。

「鞞」は、車馬の装備のことで「鼓」「鞞」(鼓の俗字)とは別字であるが、この字も通じて広く用いられた。

これらの字について、『和蘭字彙』での用例数をまとめたものが表3である。これを見ると、『和蘭字彙』でもやはり「鞞」は事実上「鼓」「鞞」の異体字として用いられている様子が窺える。

「鼓・鞞」と「鞞」は「あいまい検索」において相互にヒットしないので、検索を目的とした電子テキストでは、「鞞」をそのまま翻字しておくの不都合が生じる。しかし、その一方で、「鞞」はJIS第2水準の漢字であるので、「炮」や「鉋」の場合と同様、「鼓」または「鞞」に置き換えるのはためらわれる。よって、「鞞」については「太鞞《太鼓》」「鞞膜《鼓膜》」などと別表記挿入しておく。

表3 『和蘭字彙』における鼓・鞞・鞞

字体	分類	用例数	具体的用例と内訳
鼓	太鼓	4	太鼓4
	その他	0	
鞞	太鼓	5	太鼓5
	その他	10	鞞弓7、舌鞞2、鞞1
鞞	太鞞	33	太鞞33
	その他	1	鞞膜1

## 6. 書き分けがなされておらず異体字の関係であるかのように見える例

次に、現代では書き分けるべき字が書き分けられておらず、あたかも異体字であるかのように扱われている例を見ていく。現代の我々からすれば誤字に見えるが、そういった例が相当数にのぼるのであれば、当時としては許容された表記であった可能性が高い。

### 6.1. 癒と愈、斑と班の通用

癒 (Ⅰ・ユ・いよいよ)・癒 (Ⅰ・ユ・いえる・いやす)

班 (Ⅰ・ハン)・斑 (Ⅰ・ハン・まだら・ぶち)

『和蘭字彙』では、現代であれば「癒」と書くべきところを「愈」で記してある箇所や、「斑」

と書くべきところを「班」と記してある箇所が多い。「癒」や「斑」と記してある箇所も無いわけではないが、ごく少数である（図版5・表4、図版6・表5）。

図版5 『和蘭字彙』における癒・愈の例

癒（癒える・T77ウ）	癒が癒へ付キ居ル
癒（平癒・T43ウ）	癒へ付キ居ル
愈（愈やす・W73ウ）	愈やす
愈（平愈・B153ウ）	平愈え又全快スル

表4 『和蘭字彙』における癒・愈

字体	分類	用例数	具体的用例と内訳
癒	癒える・癒す	4	癒付キタル1、癒へ附ク1、癒へ付イタ1、癒へ付キ居ル1
	平癒	1	平癒1
愈	愈える・愈す	28	愈ヤス・愈ス・愈ヘヌ・愈ヘ付クなど
	平愈	5	平愈5

図版6 『和蘭字彙』における斑・班の例

斑（まだら・A79ウ）	斑色ノ斑
班（まだら・G122ウ）	斑ノアル
班（ぶち・O71オ）	斑ノアル
班（班猫・G124ウ）	班猫
班（班点・K74オ）	馬ノ額ノ白キ班点

表5 『和蘭字彙』における斑・班

字体	分類	用例数	具体的用例と内訳
斑	まだら・ぶち	4	斑色ノ斑、斑ノアルなど
	熟語	0	
班	まだら・ぶち	23	班ノアル、班ツクなど
	熟語	11	班猫 <sup>注12</sup> 、星班2、斑鳥1、班毛1、班牝牛1、斑点1、斑文1、白班1、黒班1

現代の漢和辞典<sup>注12</sup>を見ても、「癒」の中に「いえる・いやす」の意があり、「班」の中に「まだら」の意があるので、「平愈」「班点」などの表記も誤りとは言えない。しかし、現代の用字法とは異なるものであることも確かである。

表4・表5からわかる通り、『和蘭字彙』では「いよいよ」の意味の「愈」の用例や「グループ」の意味での「班」の用例が全く見られないので、異体字であるかのようにも見える。し

かし、これは古くから行われる別字の通用であるので、それぞれの字体で翻字しなければならない。その一方で、検索を目的とした電子テキストでは不都合があるので、「平癒《平癒》」「班點《斑点》」のように別表記挿入で対応する。

## 6.2. 掘と堀の通用

### 掘（I・クツ・ほる）・堀（I・クツ・ほる・ほり）

「掘」の字も同様である。現代では動詞の「ほる」に対して手偏の「掘」を用い、名詞の「ほり」の場合は土偏の「堀」を用いて書き分けるが、『和蘭字彙』では動詞でも「堀」を用いることが大半である。浅野晃1987でも以下のように指摘されている（p.107）。

【掘と堀】「堀せ見せたまふに」（『西鶴諸国はなし』二の五）、「根を堀て」（『武道伝来記』四の三）、「山岨なる地を堀」（『宗祇諸国物語』一の七、貞享二年）、「作助に堀出させ」（『昼夜用心記』二の二、宝永四1707年）などの用例があるが、『和玉篇』に「堀<sub>ホル</sub>」とあるから、当時の通用字体であったことがわかる。

前稿において、木偏／手偏や竹冠／草冠の通用の場合は現代の書き分け基準に沿って翻字することを述べたが、土偏と手偏の通用については他の漢字に見られず、「掘」と「堀」という組み合わせに特有の現象であると言える。

『和蘭字彙』での用例数をまとめた結果が表6であるが、動詞で用いられる「掘」は109例もあるのに対し、手偏の「掘」はわずか1例しかない。通用というよりもむしろ「堀」で書く方が一般的であった様子が窺える。

「あいまい検索」において「掘」と「堀」は相互にヒットしないので、『和蘭字彙』の電子テキストでは、現代において「掘」を使う箇所について「堀出ス《掘出ス》」などと別表記挿入を行った。

表6 『和蘭字彙』における掘・堀

字体	分類	用例数	具体的用例と内訳
掘	ほる（動詞）	1	掘 <sub>タ</sub> <small>家ナドガ鼻ノ先ニテモノヲ<sup>1</sup></small>
	ほり（名詞）	0	
	熟語等	0	
堀	ほる（動詞）	109	堀ル、堀出ス、堀通スなど
	ほり（名詞）	59	堀、堀側、小堀など
	熟語等	4	堀川 <sub>2</sub> 、堀穴 <sub>1</sub> 、堀根 <sub>テ</sub> <sup>ユカシ</sup> 1

## 7. 通用が多く異体字のようにも見えるが一部に書き分けが存在する例

「異体字のようにも見える」というのは、多くの場合、音と訓の両方に共通のものを持つ

ものである。例えば、「剋」と「刻」は共に「コク」という音と「きぎむ」という訓を持つので、「時剋」や「漏剋」という表記を目にすると、「剋」が「刻」の異体字であるかのように見える。こういったものの用例の分析を以下に示していく。

なお、本稿では詳しく取り上げないが、当用漢字時代に出された「同音の漢字による書きかえ」（昭和三十一年七月五日国語審議会報告）に示されている書きかえに含まれるものの多くが類例として挙げられる。前稿では慾（Ⅰ）→欲（Ⅰ）、坐（Ⅰ）→座（Ⅰ）の例を挙げたが、その他にも臆（Ⅰ）→憶（Ⅰ）（「臆病」など）、廻（Ⅰ）→回（Ⅰ）（「廻り道」など）、裳（Ⅰ）→装（Ⅰ）（「衣裳」など）、蝕（Ⅰ）→食（Ⅰ）（「日蝕」など）、歎（Ⅰ）→嘆（Ⅰ）（「歎息」など）など、挺（Ⅰ）→丁（Ⅰ）（「九十挺ノ大銃」など）、蹈（Ⅱ）→踏（Ⅰ）（「蹈張夕」など）など、「あいまい検索」で相互にヒットしない字の組み合わせが多数存在する。そういった場合、別表記挿入をするのが望ましいのであるが、そのすべてについて別表記挿入を行うとかなりの数にのぼる。従って、どこまでを別表記挿入していくのかについては用例数を見ながら個別に検討するのが現実的であろう。

本稿では、「同音の漢字による書きかえ」に取り上げられていないものや、取り上げられていてもその他に複雑な事情を抱える例のみを見ていく。

### 7.1. 惣・摠・總・總・総の問題

惣（Ⅰ・ソウ）・摠（Ⅲ・ソウ・ふさ・すべる）・總（配当外・ソウ）・總（Ⅱ・ソウ・ふさ・すべる）・総（Ⅰ・ソウ・ふさ・すべる）

通常、「総」（Ⅰ）の旧字体は「總」（Ⅱ）であるが、『和蘭字彙』では現代であれば「総」で書くところを「惣」で書いている箇所が圧倒的に多い。（「惣称」「惣大将」など、図版7。）

この「惣」については、浅野1987によって以下のように指摘されている（p.106）。

図版7 『和蘭字彙』における惣・摠・總・總・総の例

惣（惣称・E14ウ）	蔓、惣称
惣（惣大将・G58ウ）	惣大将、職
摠（摠称・V9ウ）	草ノ名、 <small>辨</small> 、 <small>辨</small> 、 <small>辨</small> 、 <small>辨</small>
總（總帆・Z16オ）	船、總帆
惣（すべて・K67ウ）	年寄、人、惣、惣
總（すべて・O42ウ）	其書付、總、消、之、元
總（すべて・B45オ）	總、為、元、罪、懺、悔
總（ふさ・B112ウ）	簞笥、戸、棚、總、之、元
総（ふさ・F10ウ）	總
総（ふさ・F10ウ）	彼、元、總、付、居、着、惣、着、着

【惣<sup>そう</sup>】「惣じて」の「惣」は『同文通考』にあげる「總」の俗字「惣」から出た字体であろう。『合類節用集』（延宝八1680年）には「惣而<sup>ソウジテ</sup>」と見えている。

以下に『同文通考』の記述を引用しておく（四20ウ）。

○惣<sup>ソベテ</sup> 惣也惣ハ俗ノ總ノ字

『同文通考』はこれを「譌字」（訛字）に入れているので、「惣」は「惣」や「總」の事実上の異体字と見ているものと思われるが、近世一般においてこれらが異体字の関係にあると見なしてよいか否かとなると、判断が難しい<sup>注13</sup>。

『和蘭字彙』の用例をまとめると表7のようになる。（煩雑になるので、「総」の「すべて」の項など、用例の見られなかった項目は省略した。）

ここで注目すべきは、現在我々が用いている「総」が『和蘭字彙』においては全て「ふさ」に用いられており、多数ある「惣」は「ふさ」には全く用いられていないという点である。まずこの点において、「惣」と「総」を異体字と認めるわけにはいかない。よって、人名を除く「惣」については「惣テ《総テ》」「惣称《総称》」などと別表記挿入しておく。（ただし、「和惣兵衛」のような人名については別表記挿入しない。）

表7 『和蘭字彙』における惣・總・惣・總・総

字体	分類	用例数	具体的用例と内訳
惣	すべて	9	惣テ9
	接頭辞熟語	113	惣名23、惣身14、惣世界11、惣市中8、惣評議役5、惣称4、惣大将4、惣国3、惣軍兵3、惣唱2、惣司2、惣高2、惣頭2、惣軍勢2、惣掛り2、惣嫁1、惣家1、惣構1、惣領1、惣部1、惣方1、惣代1、惣遺物1、惣打寄1、惣頭役1、惣合戦1、惣裁判役1、惣支配役君1、惣地面1、惣住人1、惣親類1、惣大評議役1、惣町人1、惣都督1、惣評議1、惣役人1、惣欧羅巴1、惣欧羅巴州1、惣押へ1、惣「バタリヨン」1、惣「バグト」1
	人名	1	和惣兵衛1
總	すべて	5	總テ5
	接頭辞熟語	1	總帆1
惣	接頭辞熟語	1	惣称1
總	すべて	1	總テ1
	ふさ	2	總2
総	ふさ	8	フサ総1、総7

次に「惣」以外の字について見て行く。まず「總」（JIS配当外）であるが、これは実際に記されている字を見ると「總」と非常によく似ており、どちらの字体であるのかを判断するのが難しいものもある。（前掲図版7参照。）ただ、出現の分布を見ると、どちらも「すべて」の用例があり、「總」がJIS配当外であることを考え合わせると、電子テキストの翻字では

「總」にまとめて差し支え無いものと判断される。「総」(Ⅰ)と「總」(Ⅱ)は、Microsoft Wordのあいまい検索において相互にヒットするので、書き分けを残しておいても問題は無い。

「摠」(Ⅲ)は『和蘭字彙』において「摠称」の一例のみなので「摠称《總称》」としておくが、一般的には「總」の異体字なので「總」(Ⅱ)にまとめて構わないであろう。

各字体の全てについてあらゆる音訓が見られるわけではないので、『和蘭字彙』の中だけで異体字であるかどうかの判断をするには限界があるが、その限られた範囲内においては、「総」(Ⅰ)「總」(Ⅱ)「惣」(Ⅱ)の三字に分けて翻字し、「摠」(Ⅲ)と「總」(JIS配当外)は「總」(Ⅱ)にして翻字するのが適切と考えられる<sup>注14</sup>。

## 7.2. 弟・第の問題

### 弟(Ⅰ・ダイ・おとうと)・第(Ⅰ・ダイ)

「弟」と「第」も「ダイ」という音を共通に持つ。現代では通用することのない字であるが、『和蘭字彙』では「次弟(しだい)」「弟一(だいいち)」「弟三(だいさん)」などの用例が頻繁に見られ、時折「第子(でし)」といった用例も見られるので、異体字であるかのようにも見える(図版8)。

図版8 『和蘭字彙』における弟・第の例

弟(弟子・B39オ)	師匠カ弟子ヲ可ツタ
第(第子・G107オ)	職人組 <small>第子</small> ノ <small>第子</small> ノ <small>第子</small>
弟(兄弟・B10ウ)	本筋トナル兄弟
第(次第・A24オ)	拘ル又依ル又次第ナル。
弟(次弟・B84オ)	物 <small>第子</small> ト云 <small>次弟</small>
第(序数・A32ウ)	第一ノ「ト」
弟(序数・E8オ)	大弟一番目ノ者ナリ

しかし、実際に用例数を数えてみると、「弟子」が23例、「兄弟」が57例、「従弟」が8例あるのに対し、「第子(でし)」は2例しかない。「兄弟」も「従弟」も全く見られないことも考え合わせると、「第子」の2例は例外的なものと思えられる(表8)。基本的に、「兄弟」「従弟」など「おとうと」に類する意味の場合は「弟」が用いられているので、両者は異体字の関係ではなく、ほぼ「次第」という言葉の場合と序数の接頭辞「第」の場合のみ「弟」と「第」が通用しているということになる。

なお、『大漢和辞典』の「弟」には、「しだい」の意味において「第」と通用するという記述が見られる<sup>注15</sup>。また前田富祺1987も、『宋元以来俗字譜』によれば、「弟」を「第」の



表8 『和蘭字彙』における弟・第

字体	分類	用例数	具体的用例と内訳
弟	弟子	23	弟子、女弟子、弟子入など
	兄弟・従兄弟	65	兄弟57、従弟8
	次弟	59	次弟59
	序数	12	第一番目、第三ノなど
	音訳	0	
第	弟子	2	弟子2
	兄弟・従兄弟	0	
	次第	54	次第52、次才2
	序数	80	第一ノ、第五月、第三代など
	音訳	5	<sup>カン</sup> 第 <sup>ヤ</sup> 、 <sup>デ</sup> 第 <sup>ネ</sup> 、 <sup>マル</sup> 第 <sup>カ</sup> など 甘第 <sup>ヤ</sup> 、第那 <sup>ネ</sup> 瑪 <sup>ル</sup> 加 <sup>カ</sup> など

かわりに用いることがあり、「第」「弟」の通用の意識が日本での用法に影響したのかもしれない。」と指摘している (p.157)。

これに加えて、草書での字体の類似も指摘できる。草書において、竹冠の字は草冠と同様に書いてもよいという慣習があるが、「一」<sup>一</sup>というパーツにもそのことは適用されるので、「第」を崩した字はほぼ「弟」と同じ字となる。そのこともあって、近世では「第」を「弟」と書くことがあったものと見られる。

これも同一字種と考えるわけには行かないので、現代において「第」と書く字は「第一《第一》」などと別表記挿入して対応する。

### 7.3. 剋・刻の問題

#### 剋 (I・コク・かつ・きざむ)・刻 (I・コク・きざむ)

「剋」と「刻」も、「コク」という音と「きざむ」という訓を共通に持つ。『和蘭字彙』においても、「時刻」がある一方で「時剋」や「漏剋」などという表記も見られるので、異体字であるかのようにも見える (図版9)。しかし、用例を分析してみると、「剋」は「時剋」「一剋」「漏剋」など、時刻に関するものにしか使われておらず、異体字とは言えない状況が確認される (表9)。

図版9 『和蘭字彙』における剋・刻の例

剋 (時剋・T72オ)	時剋後之内
剋 (漏剋・G109ウ)	漏剋後之内
刻 (時刻・L32オ)	時刻後之内
刻 (刻む・B22オ)	刻像

表9 『和蘭字彙』における剋・刻

字体	分類	用例数	具体的用例と内訳
剋	きざむ	0	
	彫刻等の熟語	0	
	時剋	4	時剋4
	時を表す熟語	8	沙漏剋3、一剋3、九十六剋1、後剋1
	その他	0	
刻	きざむ	30	刻ム、刻ミアグルなど
	彫刻等の熟語	15	鐫刻6、彫刻7、改刻2
	時刻	17	時刻17
	時を表す熟語	2	刻限1、即刻1
	その他	2	刻り目1、 <sup>ムゴキ</sup> 残刻1

#### 7.4. 計・斗の問題

##### 計 (I・ケイ・はかる)・斗 (I・ト)

これまでの例とは違い、「計」(ケイ)と「斗」(ト)とでは音が異なるので、もとより異体字ではない。しかし、『和蘭字彙』では、「ばかり」や「はかる」の訓で通用するのみならず、「時斗」や「余斗」のように「斗」を「ケイ」と読ませるような例が多数存在し、あたかも異体字であるかのように見える(図版10)。

この字の問題については、先行研究でも複数指摘されている。

浅井潤子1984は以下のように述べる。

地方文書の解読でよく問題にされる字として「斗」がある。「斗」は「ばかり」と読む。史料集などの翻刻のときには「計」とする。しかし何故「斗」が「ばかり=計」と同字なのであろうか。(中略)「斗」が「計」との同字である理由はやや字型の変化によると思われる。これはあくまでも私見であるが、「計」の正字が移動して「斗」となり、この草字体が「計」になった。この字型から容量の単位である「斗」を宛てるようになったと思われる。「斗」は音では「ト」であり、訓では「ます。たちまち(忽と同意語)。つまづく(斗)」しか訓むことができない。どう調べてみても「ばかり」と読む用例は今のところ判明しない。したがって、以上のような字型の変化をたどって「計」を「斗」と書くようになったとしか考えられない。移動字の草字体から変化した一種の異字に入ると考える。

このように、「斗」が「計」の草体から変化したものであることを指摘している。

上記引用では「史料集などの翻刻のときには「計」とする」とされているが、はっきりと楷書体で「斗」と書かれている『和蘭字彙』において、「斗」を「計」で翻字するのはためられるところである。

図版10 『和蘭字彙』における計・斗の例

計 (ばかり・K63ウ)	苦情計云
斗 (ばかり・G123ウ)	其子泣斗居
計 (はかる・P16ウ)	深斗量及酒屋樽不酒
斗 (はかる・A80オ)	林檎斗升
計 (計らう・S127ウ)	我未陳香斗計
斗 (計らう・M10オ)	今斗斗際斗
計 (不計・A84ウ)	周リ合テ又不計テ
斗 (不斗・O112オ)	不斗斗
計 (時計・A54ウ)	時計廻り終
斗 (時斗・O139オ)	時斗九打際
計 (余計・D21ウ)	着物余計着
斗 (余斗・M26オ)	斗余斗

鈴木1987も以下のように記している (p.23)。

最後に「計」と「斗」とその関連についてみたい。『好色一代男』に、助詞「ばかり」に「計」をあてるばあいが見られる。

鞆もすぐれて興なれども (中略) そこ計ばかりを明くれうつ程に (一三)

これは「計」に、はかる意のあることにもとづくものであるが、「計」が草体にくずして書かれ、「斗」のような字体になりこちらの方が助詞「ばかり」をはじめ、「計」の字の代わりに用いられることが多い。(中略)

昼夜の枕にひゞく時斗の細工 (『日本永代蔵』五1) (中略)

このように「計」の字体が変化して別字の斗と区別なく書かれることが多いと、本来「斗」と書かれるべき語をこれの本来の字が「計」であると誤解して「計」と書くばあいがある。(中略)

熨計をつゝむや雪の枚原 流水 (『生玉万句』)

「のし」は「熨斗」と書くのが本来の用字なのである。

このように、やはり「計」の草体から「斗」が生じたと述べている。

『和蘭字彙』において「熨斗」を「熨計」と書くような用例は見られなかったが、「時計」を「時斗」と書いたり、「余計」を「余斗」と書いたりする例は頻出する。それらの用例数をまとめたものが表10である。

表10を見ると、確かに副助詞の「ばかり (計り・斗り)」や「はかる (計・斗)」「はからず (不計・不斗)」「とけい (時計・時斗)」「よけい (余計・余斗)」などはどちらも相当数

表10 『和蘭字彙』における計・斗

字体	分類	用例数	具体的用例と内訳
計	ばかり	43	夫レ計リ、苦情計リ云フ、泣テ計リ居ルなど
	はかる・はからう	14	計ル2、計ラウ・計フ4、取計フ・取計ヒ3、計事5
	はからず・不計	8	計ラズ・計ラヌ4、不計4
	かぞえる	3	<sup>カゾヘ</sup> 計算ズ3
	秤量の単位	0	
	時計	36	時計24、袂時計6、砂時計2、日時計2、星時計1、香合時計1
	余計	36	余計36
	その他	24	謀計15、偽計5、活計2、術計1、生計1
斗	ばかり	110	長サ凡一間斗リ、見カケ斗リノ、泣テ斗リ居ルなど
	はかる・はからう	27	斗ル5、斗ラウ・斗ラヒ5、取り斗ラウ・取斗ヒ17
	はからず・不斗	22	斗ズ・斗ラザル4、不斗18
	かぞえる	6	斗へ落ス3、斗へ損フ3
	秤量の単位	6	六斗2、九斗2、二斗1、三斗1
	時斗（とけい）	30	時斗18、日時斗5、袂時斗3、錠時斗1、砂時斗1、水時斗1、時斗師1
	余斗（よけい）	16	余斗16
	その他	19	漏斗8、抽斗4、火熨斗4、 <sup>アカトリ</sup> 辱斗2、火斗1

見られ、異体字の関係のようにも見える。しかし、「謀計」や「偽計」は「計」でしか用いられず、秤量の単位としての「ト（斗）」や「漏斗」「抽斗」「火熨斗」などは「斗」しか用いられていないという書き分けの傾向も存在する。よって両者は異体字として捉えるべきでないものと判断される。

「斗」と「計」が通用される原因は、浅井1984や鈴木1987で指摘されている通りであろうが、すると「時斗」「余斗」など「ケイ」と読むと思われる一部の「斗」は、その発生原理からすれば「計」の異体字であり、それが楷書で書かれた際に、もともとの「斗」と同字体になってしまったということであろう。つまりそれは、「斗」の字体に着目すれば、「斗」の字体の中に「斗」と「計」の二字が「同形異字」として存在していることになる。これを「己・巳・巳」の場合と同様に、文脈によって「斗」と「計」に分けて翻字するという考え方もあるかもしれないが、『和蘭字彙』のような楷書文献では、くずし字で書かれた文献とは異なり、はっきりとした「斗」という字体で書かれているので、その処理もためらわれる。

よって、『和蘭字彙』の電子テキストでは、「計」の異体字として用いられていると見られる「斗」についてのみ、「時斗《時計》」「余斗《余計》」「取斗ヒ《取計ヒ》」などと別表記挿入を行うことにした。

## 7.5. 背・脊の問題

背 (I・ハイ・セ・せい・そむく)・脊 (I・セキ・せ・せい)

これも「背」(ハイ)と「脊」(セキ)とで音が異なるので、明らかに異体字ではない組み合わせであるが、『和蘭字彙』では「脊骨」「脊負フ」のように「背」と同様に用いられているように見える字なので、分析を行う(図版11)。

ただし、「背」の「北」の部分が「小」となっているものは、「背」の草書体をそのまま楷書体の形で書いたものと見られるので、「背」として扱った。

図版11 『和蘭字彙』における背・脊の例

背 (せ・L39ウ)	背 <small>セ</small> 低 <small>ハイ</small> 子 <small>セイ</small>
脊 (せ・L32オ)	脊 <small>セ</small> ノ高 <small>ハイ</small> 牛 <small>セイ</small> 男 <small>セイ</small>
脊 (せぼね・G118オ)	脊 <small>セ</small> 骨 <small>ハイ</small>
脊 (羅脊板・R8ウ)	羅脊板 <small>セイ</small>

表11 『和蘭字彙』における背・脊

字体	分類	用例数	具体的用例と内訳
背	せ・せい	3	背2、背骨1
	せむし	3	馱背 <sup>セムシ</sup> 2、背僕1
	「せ」の当て字	0	
	そむく	66	背ク66
	ハイと読む熟語	8	違背8
脊	せ・せい	50	脊42、脊負フ3、脊骨4、脊中1
	せむし	4	脊僕4
	「せ」の当て字	6	矢脊隠シ3、矢脊陰シ1、羅脊板2
	そむく	0	
	セキと読む熟語	4	脊椎2、屋脊2

表11を見ると、やはり「せ」や「せい」と読ませるものは、「背」よりも「脊」の方が圧倒的に多いことがわかる。「脊負フ」「脊骨」はもとより、「矢脊隠シ」(「瘦せ隠し」の当て字、馬の尻にかける覆いのこと)や「羅脊板」(ラセイタ、毛織物の一種、ポルトガル語raxetaに由来する外来語に対する当て字)などの当て字にまで、『和蘭字彙』では「背」ではなく「脊」を用いている。

しかしその一方で、ハイと読む熟語（「違背」）とセキと読む熟語（「脊椎」「屋脊」）は完全に分かれており、混用するところがない。「そむく」の訓も「背」しか用いていない。

要するにこれは、現代において「背」で書く「せ・せい」を、『和蘭字彙』ではほとんどの場合「脊」で書いているということである。勿論、一部の訓における通用に過ぎないので異体字でないことは明らかであるが、現代とは異なる用字法をしていることもまた確かである。「脊骨」や「脊中」をそのまま翻字しておくだけでは検索の漏れを生じる可能性が高いので、「せ・せい」と読ませていると見られる「脊」については、「脊《背》」「脊骨《背骨》」「脊中《背中》」などと別表記挿入しておく。

## 8. 近世期によく見られる通用字の使用分布

以下は近世期によく見られる通用字の例である。古文書においては常識的な表記であるが、使用の分布を示した研究はほとんど見られないので、『和蘭字彙』における分布を示していく。

### 8.1. 控・扣・叩の通用

控（Ⅰ・コウ・ひかえる）・扣（Ⅱ・コウ・ひかえる）・叩（Ⅰ・コウ・たたく）

「控」と「扣」はどちらも音に「コウ」を持ち、訓に「ひかえ・ひかえる」を持つ。実際、原文が「扣」となっているところを「控」と翻字することもあるであろうが、『和蘭字彙』の場合は「扣ク」と書いて「たたく」と読ませている箇所もあるので、異体字として扱うわけにはいかない。（表12、なお、「叩」もコウの音を持つ。）

表12 『和蘭字彙』における控・扣・叩

字体	分類	用例数	具体的用例と内訳
控	ひかえ（る）	13	控へ、控ル、手控帳など
扣	ひかえ（る）	12	扣へ、扣サスル、扣帳など
	たたく	10	扣ク、扣キ落ス、扣キ起スなど
	その他	1	紐扣 <sup>ネクツガイ</sup> 1
叩	たたき・たたく	5	叩キ、叩タ、叩ヒタ、叩クノデ薄クナルなど

### 8.2. 姓と性の通用

姓（Ⅰ・セイ・ショウ・かばね）・性（Ⅰ・セイ・ショウ・さが）

『和蘭字彙』には「百姓」や「素性」に対して「百性」「素姓」といった表記がなされる箇



所が時折見られるが、それらは近世の古文書においてよく見られる表記であり、現代の我々からすれば誤字のように見えるものの、当時の慣習からすれば誤字とは言えない。しかし、用例数を数えてみると、どのような熟語でも相互に入れ替え可能であるわけではなく、その二つの熟語に限って通用する様子が窺える(表13)。『和蘭字彙』では「百姓」が3例、「素姓」が1例見られるのみであり、他の大半の「性」を含む熟語は「姓」と混ざることがない。

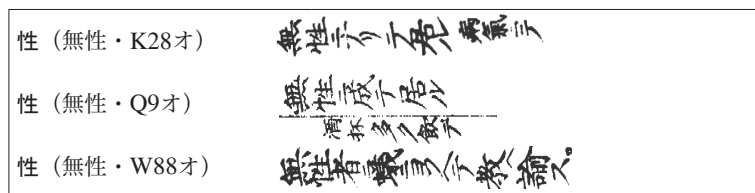
「百姓」と「素姓」については、それぞれ「百姓《百姓》」「素姓《素性》」と別表記挿入しておく。

表13 『和蘭字彙』における姓・性

字体	分類	用例数	具体的用例と内訳
姓	百姓	21	百姓21
	素姓	1	素姓正シキ1
	せい・かばね	1	姓1
	その他の熟語	1	小姓1
性	百姓	3	百姓3
	素性	4	素性4
	せい・さが	30	言語ノ性、烈シキ性ノ人など
	その他の熟語	109	性質37、性根22、性急17、性替へ11、性理5、同性3、無性3、性得2、陰性2、本性2、性骨1、性心1、性体1、気性1、堪忍性1

なお、「性」の「その他の熟語」のうち、「無性」の3例は「ぶしょう」と読むべきもので、現代であれば「不精」「無精」と書くべきものである(図版12)。「ぶしょう」については次項でも触れるが、これら3例の「無性」は「無性ニ《無精ニ・不精ニ》」などと別表記挿入しておく。

図版12 『和蘭字彙』における「無性」(ぶしょう)の3例



### 8.3. 精と情の通用

精 (I・セイ・ショウ・くわしい)・情 (I・ジョウ・セイ・なさけ)

「精」と「情」の関係も同様である。浅野1987に指摘があるので引用する。(p.108)

【情と精】『日本永代蔵』五の四に「明暮油断なく情に入」、『世間胸算用』五の二に「手習を情に入よ」とある。この「情」の字も、現在の用字意識から「精」の誤記として

はいけない。当時の通用字体は、「情に入る」であったのである。『志不可起』七（延宝・天和ごろ）に「せいをいだすハ精を出すト書き、せいをいるゝハ情に入るゝト書くべき也」と見えるからである。しかし、この表記の規範は一般に広く通用したものではなく、「情」と「精」の混用が行われている。『風流曲三味線』六の一（宝永三1706年）には、「御精に入られ」とある。また、「情出す」（『好色二代男』八の二）、「情を出しければ」（『分里艶行脚』四の二）、「情出す躰」（『役者色仕組』二の一、享保五1720年）と見え、「情」と「精」との混用を指摘できるのである。

上記の引用は「精を出す」といった表現について論じているが、『和蘭字彙』ではその漢語表現である「出精（しゅっせい）」でも同様の通用が見られ、「出情」と書かれる例が多く存在する（図版13・表14）。「出精」は現代においてあまり使われなくなった言葉であるが、ほぼ「努める」や「頑張る」に相当する語である。その反対の意味の語は「不精・無精（ぶしょう）」であるが、それも現代では「不精者・無精者」「筆不精・筆無精」といった定型表現で用いられることが大半であろう。『和蘭字彙』においてはそれら「不精・無精」の文脈でも「不情」と書かれる例が見られ、「出情」や前項で示した「無性」とともに、「しゅっせい」や「ぶしょう」であることに気づかれにくい。

図版13 『和蘭字彙』における精・情の例

精（出精・B109オ）	出精ニテ仕事スル
情（出情・N28ウ）	筆古事出情スル
精（精出す・A16ウ）	筆ヲ精出シテスル
情（情出す・H11オ）	情出シテ仕事スル
精（不精・L71ウ）	不精人
情（不情・D26オ）	不情者
精（無精・O51オ）	無精人

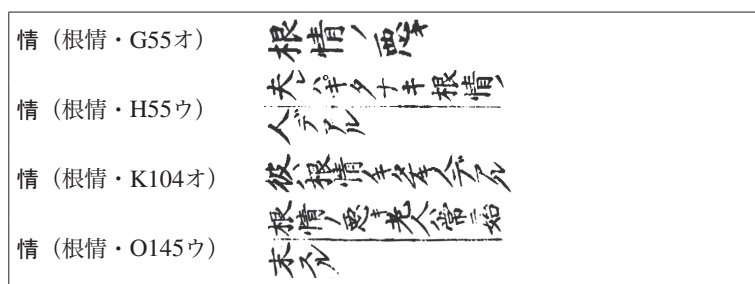
しかしその一方で、「精気」「精液」「精製」などは「精」、「情欲」「愛情」「苦情」などは「情」ときちんと書き分けられている（表14）。「精」と「情」のどちらでも書いて良いものは、「出精（出情）」「不精・無精（不情・無情）」「精を出す（情を出す）」など、一部の語に限られる様子が見て取れる。このように、『和蘭字彙』における用字法の分析は、通用の範囲を知ることにおいても有効である。

なお、「情」の「その他の熟語」のうち、「根情」の4例は現代であれば「根性」と書くべきものである（図版14）。『和蘭字彙』において「根性」は見られなかったが、「根情」については「根情ノ《根性ノ》」などと別表記挿入しておく。

表14 『和蘭字彙』における精・情

字体	分類	用例数	具体的用例と内訳
精	出精	33	出精、出精スルなど
	精(を)出す	28	精出ス、精ヲ出スなど
	不精・無精	27	不精18、無精9
	その他の熟語	39	精気10、精液7、精製5、精密4、精鋸4、精勤3、精神2、精粗1、精脈1、製精1、精進1
	せい	2	精2
	訓読み	5	精キ3、精シク1、精ニ1 <small>コマヤカ</small>
情	出情	10	出情、出情スルなど
	情(を)出す	1	情出シテ仕事ヲスル1
	不情・無情	1	不情者1
	その他の熟語	83	情欲27、愛情11、苦情15、色情9、 <b>根情</b> 4、実情3、人情3、歎情2、情事1、情愛1、気情1、懇情1、真情1、直情1、風情1、蒙情1、欲情1
	なさけ・じょう	50	情、情ナキ、情深キなど

図版14 『和蘭字彙』における「根情」の4例



#### 8.4. ケと個の通用と箇

##### ケ・個 (コ・カ)・箇 (I・カ・コ)

「ケ」は「一ヶ月」などで用いられる「ケ」である。この字体は漢和辞典にも掲載されておらず<sup>注16</sup>、そもそも漢字であるのかどうかということから議論になりそうな文字である。現代では数字が前に来る場合にのみ使用されるので、記号のようなものと認識されているかもしれないが、『和蘭字彙』では「ケ様」(かよう)、「ケ程」(かほど)、「ケ條」(かじょう)など、前に数字が来ない場合でも用いられているので、むしろ漢字として用いられているように感じられる(図版15)。

「ケ」は現代において、「一ケ10円」のように次に単位が来ない場合に「コ」と読み、「一ヶ月」のように次に何らかの単位が来る場合は「カ」と読む。その点においても漢字に近い存

図版15 『和蘭字彙』におけるケ・個・箇の例

ケ (ケ様・Z31ウ)	ケ様ニセ子六ナク。
ケ (ケ様・D63オ)	ケ様ニ又左様ニ
個 (個様・D63オ)	個様ニ又左様ニ
ケ (ケ条・A82ウ)	ケ条
ケ (ケ条・I8オ)	唯越 <small>ケ</small> を <small>ケ</small> 判 <small>ケ</small> 許 <small>ケ</small> 略 <small>ケ</small> 等 <small>ケ</small> 名 <small>ケ</small> 電 <small>ケ</small> 不 <small>ケ</small> 子 <small>ケ</small> よ <small>ケ</small> ケ <small>ケ</small> 條 <small>ケ</small> 泰 <small>ケ</small> 出 <small>ケ</small> 不 <small>ケ</small>
個 (個条・V147ウ)	前 <small>ケ</small> 方 <small>ケ</small> 個 <small>ケ</small> 條
箇 (一箇・R37ウ)	一箇ノ圓
箇 (箇・S156オ)	箇 <small>ケ</small> ス <small>ケ</small> ナリ
個 (一個・V157オ)	一箇ノ題 <small>ケ</small> 出 <small>ケ</small> ス

在であると言えるが、その漢字の中では「个」が「ケ」に最も近い字であろう。「ケ」は「个」の字体から生じたものであると見るのが一般的であると思われるが、『和蘭字彙』において「个」の字体は全く見られず、その他の日本の文献でも「个」の字体が使われることはそれほど多くないように思われるので、「ケ」を「个」で翻字するのはためらわれる。

その次に「ケ」に近い存在が「個」と「箇」である。現代において、「個」は単位を付けずに数える場合の「コ」（「一個」など）やその数を表す「個数」、あるいは「個人」「個別」などの熟語で用いられるのに対し、「箇」は単位を付けて数える場合の一部（「一箇所」など）で稀に用いられるほか、「箇所」「箇条書き」などで用いられるというように、両者である程度の使い分けがなされるようになってきている。恐らく、「個」は「コ」と読ませる場合に、「箇」は「カ」と読ませる場合にというように、現代では用法が分化してきているのであろう。しかし、図版15で見たように、『和蘭字彙』ではそのような使い分けがなされているわけではない。

『和蘭字彙』において、「ケ」は「箇」と「個」のどちらに近いのであろうか。それらの用例数をまとめた結果が表15である。（「ケ」は大字の「ケ」と小字の「ケ」があるが、判断が難しい場合も多いので、区別せずに数えた。）

表15を見ると、「ケ様・ケ条」と同様のものとして「個様・個条」と記されているところが同程度見られるので、「ケ」と「個」が近い関係にあることがわかる。しかし、単体で用いる接尾辞の用例（「一ケ」など）が「ケ」には見られず、逆に「一ヶ月」のような単位を伴う用例が「個」には見られないという用法の差も存在する。

よってこれらも異体字の関係にあると見ることはできず、それぞれ別に翻字することになるのであるが、問題は「ケ」をどの字で翻字するかということである。片仮名の「ケ」にするのか、小字の「ケ」にするのか、あるいはその両者を字の大きさによって翻字し分けるの

表15 『和蘭字彙』におけるケ・個・箇

字体	分類	用例数	具体的用例と内訳
ケ	語頭のケ	31	ケ様27、ケ条3、ケ程1
	接尾辞のケ	0	
	…ケ月など	54	…ケ月30、…ケ年15、…ケ所5、…ケ国2、…ケ条1、…ケ村1
個	語頭の個	28	個様27、個条1
	接尾辞の個	2	一個ノ題1、九個ノ歌ノ女神1
	…個月など	0	
箇	語頭の箇	0	
	接尾辞の箇	11	一箇10、箇 <sub>コ</sub> ツニツノツナリ <sup>1</sup>
	…箇月など	0	
	その他	10	荷 <sub>コ</sub> 箇・荷箇り・荷箇10

か、はたまた「个」で翻字するのかといった様々な案が考えられる。

どの方法も一長一短であるが、『和蘭字彙』の電子テキストでは小字の「ケ」を用いて翻字することにした。「ケ様」「ケ条」など、あきらかに「カ」と読ませている以上、これは片仮名ではなく漢字として用いられているものと見られ、また片仮名の「ケ」で翻字した場合には、他の片仮名の「ケ」と混ざってしまい、検索が困難になるためである。

一方、「ケ様」（かよう）や「ケ程」（かほど）は、「このよう」「これほど」の意味で用いられており、当て字と見られるので、「ケ様《斯様》」「ケ程《斯程》」などと別表記挿入して表記することにし、それに伴い「個様」も「個様《斯様》」とする。

これに対し、「ケ条」は同様の当て字ではないので、現代でもよく用いられる表記である「箇条」により、「ケ條《箇条》」と別表記挿入し、「個条」も「個条《箇条》」と別表記挿入しておく。

## 9. おわりに

以上、『和蘭字彙』の電子テキスト化で問題となった異体字判断とその処理について、用例数を挙げつつ論じてきた。もとより本稿で示した判断が近世楷書体文献の全てに当てはまるわけではないであろうが、一つの例として参考になればと思う。

電子テキストは用例検索において非常に便利なものであるが、近世以前の文献を電子テキスト化するということは、現代と異なる漢字使用体系を用いて記されている日本語を現代の漢字コード体系の中に押し込めるという作業であり、そこに記されている字をそのまま機械

的に翻字するだけでは様々な面で不都合が生じる。電子テキスト化した本人が自らの研究のためだけにそれを利用するのであれば大きな問題は生じないが、入力者と利用者が異なる場合においては、両者においてある程度の共通認識がなければ、気づかないうちに「検索の漏れ」が生じ、誤ったデータ処理に基づく論が立てられてしまう危険性がある。入力する側にとってもそれは非常に不本意なことなので、なるべく利用者に負担をかけない形で電子テキスト化しようとするのであるが、様々な利用目的や研究目的を想定しなければならず、それゆえ「異体字であるのか否か」ということと、「検索漏れが生じないか否か」ということに悩まされ続けながらこの作業に取り組んでいる。このような問題は今後多くの入力者や利用者間で共有されていくべきであると考え、前稿と本稿を草した次第である。

## 参考文献

- 浅井潤子1984「近世地方文書用字考」『史料館研究紀要』16  
 鈴木丹士郎1987「近世の漢字とことば」『漢字講座』7（明治書院）  
 浅野晃1987「浮世草子の漢字」『漢字講座』7（明治書院）  
 前田富祺1987「川柳の漢字」『漢字講座』7（明治書院）  
 酒井憲二1998「甲陽軍鑑の通用字」『国語文字史の研究』4（和泉書院）  
 櫻井豪人2013a「『和蘭字彙』電子テキスト化による『英和对訳袖珍辞書』初版の訳語の研究」『日本語の研究』9-3  
 櫻井豪人2013b「『和蘭字彙』に見られない『英和对訳袖珍辞書』初版の訳語一その1：Medhurst英華字典の訳語をそのまま用いている訳語一」『近代語研究』17（武蔵野書院）  
 櫻井豪人2014「『和蘭字彙』に見られない『英和对訳袖珍辞書』初版の訳語一その2：Medhurst英華字典の訳語に改変を加えている訳語一」『国語語彙史の研究』33（和泉書院）  
 櫻井豪人2016「近世楷書体文献の電子テキスト化における漢字字体処理について—『和蘭字彙』を例に—」『国語と国文学』93-5

## 注

- 1 本稿でもWindows版のMicrosoft Word2010と2013を使用した、「あいまい検索」による検索結果は同じであった。
- 2 杉本つとむ編『異体字研究資料集成』一期一卷（雄山閣出版1973）による。
- 3 以下の図版はすべて杉本つとむ解説『和蘭字彙』（早稲田大学出版部1974）による。
- 4 酒井憲二1998も『甲陽軍鑑』諸本において「鉄炮」「鉄鉦」と記されている例を挙げている。
- 5 本研究では修訂第二版を用いた。
- 6 国文学研究資料館「日本古典籍総合目録データベース」でWeb公開されている広島文教女子大学附属図書館沖森文庫蔵の寛延元年版（資料館マイクロフィルム84-11-5,H499）による。上記の引用箇所は全102コマのうち42コマ目3行目と43コマ目終わりから4行目にある。
- 7 『和蘭字彙』における「あぶる」の用例数は、「焙」が46例（「焙物」「焙子」などを含む）、「炙」が1例である。



- 8 以下の各表の「具体的用例と内訳」欄において、問題となっている字以外は基本的に常用漢字字体に直して示す。例えば、原文で「鐵炮」となっている場合、問題となっている字は「炮」なので、「鉄炮」と表記する。また、活用語は終止形に揃えた形にまとめて示したことがある。
- 9 『同文通考』の「國訓」にも「○鉞カンナ木ヲ平ニスル器○鉞ハ俗ノ鉞ノ字鉞ハ石斜切短矛也」(四10ウ)とあり、そこからも日本では「かな」の漢字として使われていた様子が窺える。
- 10 この字体は太宰春台『倭楷正訛』(延享五1748年成、宝暦三1753年刊)の7オにも見られる。また、宇田容『正楷字覧』(天保五1834年刊)の四画上14ウに「施」についての記述があり、「㊦ノ右ニ㊧ヲカクモノハ非」とある。旁に「色」を書く字は誤りであると指摘しているが、逆に言えば近世期にはそういった字体がよく見られたのであろう。(『倭楷正訛』と『正楷字覧』はそれぞれ『異体字研究資料集成』一期四巻・一期五巻の影印によった。)
- 11 これらの蘭語見出しはgroenvlieg(英語直訳はgreen fly) およびSpaansche vlieg(vliegの子見出し、英語直訳はSpanish fly)なので、「まだらねこ」ではなく「はんみょう」の例である。
- 12 『改訂新版漢字源』の「愈」の③に「いえる(㊦)。病気のもとがとれてさっぱりする。」とあり(p.544)、「班」の④の㊧に「まだらなさま。」とある(p.987)。
- 13 「同音の漢字による書きかえ」では、「惣」を「総」に書き換える提案がなされている。
- 14 なお、「總」の異体字には「惣」(IV)や「搵」(JIS配当外)もあるが、これらについては『和蘭字彙』に見られなかった。
- 15 『大漢和辞典』修訂第二版巻四p.698、「弟」の㊦に「しだい。順序。或は第(8-25943)に作る。」とある。逆に、「第」には「弟」に通用するという記述が見られない(巻八p.760)。
- 16 『大漢和辞典』修訂第二版および補巻にも掲出されていない。